



▲長尾大池で雑魚捕りを楽しむ住民たち（昭和45年）。



▲池の周辺には住宅が立ち並びます。

地域こそって「雑魚捕り」を楽しんだ

長尾大池

江戸時代から北河内では、農業用のため池にコイやフナ、ウナギなどを放流して養殖し、水を抜いて池をさらった時に捕まえる「雑魚捕り」という行事が盛んでした。捕れた魚は、洗いや甘露煮にして食べたり、売って村の収入にしたりしていました。

江戸時代前期に築造された長尾大池でも古くより雑魚捕りが行われていたと考えられます。昭和に入ってからには干ばつなどで水位が下がった年にだけ行われたため、10年、15年に1度の一大行事となりましたが、大人から子どもまで大勢の人たちでにぎわいました。写真は今から約40年前の雑魚捕りの様子を撮影したものです。長尾で農業を営む分林正明さん（77歳）も中学生の頃に参加したことがあります。「大池の雑魚捕りは地元の人にとってお祭りのようなものでした。みんなが何カ月も前から道具を作って準備し、心待ちにしていたものです。5kgを超えるコイも捕まえたことがありますよ」と懐かしく語ります。また、農業用水が不足した時は雑魚捕りが終わった後の残り水を「銭水」として売っていたそうです。

今も地域の水田に水を供給し続ける長尾大池ですが、現在では当時のような雑魚捕りは行われなくなり、水鳥が羽を休める場所となっています。護岸はコンクリートで整備され、池のほとりの木々だけが、昔と変わらず水面を吹く風に揺れています。

（平成23年2月号）